



290号
2024/1

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



2024年
明けましておめでとうございます

2024 年の干支は龍です。中国では古くから龍は瑞獣とされています。商周時代の青銅器にすでに龍の模様があり、さらに4千年以上前の遺跡に龍を象った貝で作った人造物がありました。龍にまつわる話は多く、四字熟語に「葉公好龍」と「画龍点睛」などがあります。ここに掲載した龍は町田市民フェスタで実演した作品です。

(2023年11月 東京町田市、市民協働フェスティバル「まちカフェ」にて 日中水墨協会会長 満 柏)

'わんりい' 2024年1月号の目次は20ページにあります



辰年にちなむ諺と言葉

寺西俊英

新年あけましておめでとうございます。

今年は十二支の第五・辰年ですね。中国は十二支に動物を当てはめています。辰年は、龍（竜）を当てはめました。年の初めに当たり、日本と中国の龍（竜）年にまつわる諺やよく使う言葉を取り上げてみました。

まず竜の文字ですが、これは龍の省略形の俗字です。竜は、ご存知のように想像上の動物で、十二支の中で唯一実在する動物ではありませんね。

中国では、「角、たてがみ、鋭い爪を持ち、ウロコの有る巨大な爬虫類の形をしており、雲を呼んで天に昇り、あるいは淵にひそむ水神」と考えられていました。「龍」の文字も、漢和辞典で文字の成り立ちをみると、「象形文字。かざりがあり大きな口を開けた頭部をもたげて、長い体をくねらせているヘビの形にかたどり『りゅう』の意を表す。これを部首にして『りゅう』に関する意を示す字が出来ている」と出ています。龍駕（天子の車）、龍徳（天子の優れた徳）という言葉があるように、龍（竜）は天子のことを表します。また竜宮は竜神の住んでいる海中の御殿を言うなど色々な意味に使われています。

前段はこのくらいにしてまず諺（成語）や言葉を見てみましょう。すぐ思いつく諺や言葉はいくつもありますが、その中でよく知られている「登竜門」、「画竜点睛」、「独眼竜」、について取り上げましょう。

〈登龍門〉

「龍（竜）門」とは、中国では、大禹が黄河・中流域韓城市近くにある龍門山を切り開いて造ったと言われる急流の禹門口のことです。春になると鯉が雲と雨と共に遡り、ついには雷火に尾を焼かれて龍になると言われているそうです。後世、立身出世の関門「貢院」（科挙の試験場）を指し、「鯉魚跳龍門」という言葉で科挙の試験に合格するという意味になりました。現在では「そこを通れば出世の道が開かれると言う関門」の喩えですね。友人の中国人の話では、今大学入試も「跳龍門」と

言われているそうです。ご存知のように大学入試は日本と違い、受験生は6月上旬に全国で一斉に行われる「高考」と呼ばれる全国统一試験を受けます。年に1回しかないチャンスなので、まさに「跳龍門」になりました。

〈画竜点睛〉

この言葉も人口に膾炙している言葉ですね。「最後に大切な一点に手を加えてその物事を完成させる意味」に使われています。逆に「画竜点睛を欠く」と言えば、「最後の仕上げができていないため、不完全に終わること」を意味しますね。「画」と言う文字は大きく二つの意味があり、区画という言葉のように「境」の意味と「描く」という意味があり、ここでは後者の意味ですね。「点」は、「てん、しるしをつける、書き入れる、あかりをつける、地点」など多くの意味があります。ここでは、「書き入れる」です。「睛」は、晴れの文字と似ていますが、こちらは目偏で、日偏の晴れとは全く異なり、「ひとみ、瞳」のことです。この言葉は、絵の名人・梁（502年～557年）の張僧繇^{ちやうそうよう}が竜を描いて、最後にひとみ（睛）を書き（点）入れたら竜がたちまち昇天したという故事からです。このエピソードは、【歴代名画記】や【水衡記】などにあり有名なエピソードと思われます。

〈独眼竜〉

西暦907年、300年近く続いた唐王朝も終わりを告げました。王朝末期には、廷臣や節度使などの地方官吏の有力者は力を蓄え王と称する群雄割拠が始まり、唐の滅亡と共に五代十国時代（907年～960年）に突入しました。五代の最初の政権である「後梁」を立てたのが開封節度使の朱全忠^{しゆぜんちゆう}です。黄巢の乱で共に唐朝のために働いた李克用^{りこくよう}という人物は、黒衣を纏った精鋭部隊の「鴉軍」^{あぐん}を率いる猛将であり、朱全忠が後梁を建国してからは、彼の強力なライバルとなり、後に子の李存勗^{りそんきよく}が後梁を滅ぼし、後唐を建国しました。この將軍は、片方の目が眇（すがめ＝片目が悪いこと）でした。

「五代史」に、『克用少くして驍勇、軍中号して李

あじ鷓鴣という。その一目眇なり。その貴となるに及ぶや、又、独眼竜と号す』と記されています。「鷓」と言う文字（垂に鳥）は「鴉」と同じでカラスのことです。彼は、唐王朝にも忠節で、唐が滅んだ後も臣節を守ったので、ここから勇猛で徳の高い片目の人を独眼竜と呼ぶようになりました。ご存知のようにわが国では、伊達政宗がそのように呼ばれていますね。

竜に関する諺や成語はまだたくさんあります。筆勢が雄渾で生き生きとしていることを表す「龍飛鳳舞」、この上ないめでたさを表し、結婚証明書に印刷されている「龍鳳呈祥」、子供の出世を願う意味の「望子成龍」、力にあふれ活気に満ちた様子の喩えである「龍騰虎躍」など挙げればきりがなくらいです。やはり「龍」は縁起の良い動物の筆頭格でしょう！

新年会のご案内

3年振りにわんりい新年会のご案内です。

コロナも5類に移行し、自己責任で対応することになりました。わんりいも、恒例のシュワンヤンロウの鍋に菜箸を備えるなど気を付けながら、下記の通り、2024年新年会を開催いたします。3年ぶりの新年会です。久しぶりに皆様にお目にかかるのを楽しみに致します。

▶ 記 ◀

日時：2024年2月4日(日)、11:00~15:00頃
場所：麻生市民会館料理室、新百合ヶ丘駅3分
会費：2,000円 定員：40名
申込締め切り：1月15日
☎090-1425-0472
E-mail：t_taizan@yahoo.co.jp
(わんりい会員・会友のみご参加いただけます)



四川在住の大川健三さんからの年賀状

春節の時期に神々の使者に扮して踊り一年の豊穡を祈る様子の一場面です。場所は丹巴県巴底郷の山奥で、唐書に記録された東女国の流れを継ぐ領主の館跡に隣接しています。此の地一帯の古来からの名前はワイリー方式のチベット語ローマ字転写で“rGyalmorong”、発音はギャルモロン或いはゲェルモロン、意味は女王の谷です。

今月の言葉も、日本ではあまり使われませんね。それでも「広辞苑」には、〔孤注＝博打に負け続けたものが最後に、有り金全部をはたいて最後の勝負に出ること、孤注一擲〕と出ていました。寡聞にして、私には初めて知る言葉でした。

・>・>・>・>・>・>

宋の時代、寇準こうしゅんという、非常に愛国心の強い大臣がいました。

ある時、遼の簾皇太后しよほうが大軍を引き連れて宋朝に戦いを挑んできました。宋の皇帝はとても勝てないと思い、大臣たちを集めて対策を相談しました。そこで、寇準は、遼の軍を迎え撃つことを主張し、皇帝が前線に赴き、兵士たちを見舞うよう進言しました。開戦の当日、皇帝が前線を視察すると、俄然兵士の士気が上がり、遼軍を散々に打ち負かしました。

それから、皇帝は寇準を厚く信任し重用しましたが、同僚大臣の王欽若おうきんじやくがこれに嫉妬

して皇帝に言いました：「陛下、寇準を重用してはいけません。彼は博打打ちです。あなたを博打の元手として賭けをしています。まるで一か八かの勝負をしているようです。彼を頼りにするのは、危険すぎます」

・>・>・>・>・>・>

言葉の意味：孤注＝賭けをする。擲：さいころを投げる。ピンチの時に、全力を上げて、危険を冒すことの喩え。

言葉の使い方：獵師は失敗したが、獵犬はそれでも、孤注一擲、オオカミに向かって走り出した。

・>・>・>・>・>・>

子供向けの本ですから、上記のようにしか書いてありませんが、このお話は、北宋2代皇帝太宗、

3代皇帝真宗しんに仕えた政治家寇準のお話です。907年に唐朝が滅んで以来、唐の領土は多くの小国に分裂し、五代十国と言われる時代が続きましたが、979年に宋が全土を統一しました。

しかし、建国当時は未だ北方の異民族の力が強く、お話に出て来る、「遼の簾皇太后」との戦いも、契丹族の国、遼からの攻撃でした。この時は、寇準の活躍で勝利しましたが、宋の朝廷には、北方民族と平和的に住み分けようという気分がかなり強かったようです。この後、寇準は、北方異民族との

和睦を主張する王欽若の讒言で左遷されて、将軍としての活躍は封じ込められてしまいました。

それで結局、遼の後に力を付けて台頭してきた金の侵略を防げず、1127年、時の皇帝徽宗きを北方に連れ去られて宋は滅亡しますが、以後、この宗は南宋と呼ばれるようになります。

南宋も武力を誇るような国家ではなく、侵略を繰り返す金との戦いで、幾度となく金を破り、南宋の力を誇示しようとした岳飛がくひのような愛国者も出現したのですが、宰相の秦檜しんかいは、個人的な勢力争いから、嘘の讒言で岳飛を牢屋に入れて毒殺してしまいました。それからは、金に対して賠償金や贈り物を贈ることで、国を保つ状態が続きました。南宋の、強い国を望む人々にとっては屈辱的な歳月で、いろいろな話が後世に伝えられる時代となりました。

しかしそれは、一方で、宋の人々が、経済の活性化した国土を、戦争で荒らされて生産性が落ちるのを嫌ったこともあるようです。新しい時代の趨勢なのでしょう。



挿絵：満柏画伯

李之儀の〔卜算子〕
ほくさんし

報告: 花岡風子

李之儀は北宋の時代、1038 年に今の山東省に生まれ、1078 年に 40 歳で科挙に合格しています。宋代を代表する大詩人として有名な蘇軾や黄庭堅と親交があり、特に蘇軾を非常に尊敬していました。蘇軾と共に、王安石の新法をめぐる〈新旧党争〉に巻き込まれて、官吏としては不遇な人生を送り、詩人としても大して有名ではないのですが、たった一首が古今問わず長く愛唱され続け、今は亡きテレサ・テンが新しい歌曲として歌ったことで、今でも歌い継がれています。

「李之儀は他にも色々詩を書いています、どれもパツとしない。この詩だけが、千年も読み継がれているなんて、本人もこれを知ったら驚くのではないのでしょうか。一首で千年持つ。こういう一発屋詩人がたまにいるのも、漢詩の面白いところですね。他にも張継の『楓橋夜泊』なんかもそうですね。内容もジャンルも違いますが、どちらもリズムが良く暗唱しやすく、発音練習にも丁度良いですね」と植田先生。

bǔ suàn zǐ lǐ zhī yí
〔卜算子〕 李之儀

wǒ zhù cháng jiāng tóu
我住长江头
jūn zhù cháng jiāng wěi
君住长江尾
rì rì sī jūn bú jiàn jūn
日日思君不见君
gòng yǐn cháng jiāng shuǐ
共饮长江水

cǐ shuǐ jǐ shí xiū
此水几时休
cǐ hèn hé shí yǐ
此恨何时已
zhǐ yuàn jūn xīn sì wǒ xīn
只愿君心似我心
dìng bú fù xiāng sī yì
定不负相思意

我^{かみ}は長江の頭に住み

君^{しも}は長江の尾に住む

日日君を想えど君を見ず

共に長江の水を飲む

此の水^{いず}幾れの時にか休^やまん

此の恨^やみ何れの時にか已^やまん

只^{ただ}願わくば君の心我が心に似^{そむ}て

定めて相思の意に負かざらんことを

意味は非常にわかりやすく、フォークソングのような内容です。

私は長江の上流に住んでいて

あなたは長江の下流に住んでいる

日日あなたのことを想うけれど会うことはできない
共に長江の水を飲んでいるというのに。

この長江の流れはいつまで続くのだろうか？

会いたくても会えないこの恨みはいつ終わるのだろうか？

あなたの心も私の心と同じように

互いの思いに背かないでいて欲しい。

この曲はテレサ・テンが歌って非常に有名になりましたが、私がかつて中国人オペラ歌手の先生について歌を習っていた時期に、クラシックの楽譜もあったことを記憶しています。その時に、最初の四句は一度見たら、その情景が心に焼き付くように忘れられないなあ、と思ったものでした。

テレサ・テンバージョンを知ったのは、その後でしたが、直ぐにあの歌詞だ、と思いました。

1983 年にテレサが 30 歳の誕生日を迎えて間もなく発表した『淡淡幽情』というアルバムに収録されています。このアルバムは全て〈詞〉の有名な作品を現代風の歌謡曲に復刻したもので、どの曲もテレサの天才的な歌唱力で圧倒的な完成度を誇っています。今回はメンバーの方のご協力で、講座の中でテレサ・テンの歌う見事な〔卜算子〕(テレサのアルバムでは『思君』)を聴かせて頂きました。

さて、この CD の説明には、李之儀は度重なる左遷の憂き目に遭い、この詞は中年時代、一人異郷の地で愛する妻に書いたものだ、という解説が載ってい

て、「え？」と思いました。この詩を読んだ時から、女性が男性を想う内容だと思い込んでいましたので。同じ事を思った方が質問されましたが、先生のご見解も「どう見ても女性から男性でしょう。男性の思いだとする説は少数派です。仮にそうだとすると、感動しますか？」というものでした。「ああでもない、こうでもない」と色々解釈を考える人がいるけれど、その解釈で感動するかどうかを基準にするといいですよ。クイズじゃないんだから、心にグーっときたなら、その解釈で正しいのではないのでしょうか」という植田先生の言葉に私はハッとしました。

漢詩を鑑賞するのは、あくまで現代に生きる生身の私自身。目的はその私が感動すること！ だったなあ、と思いました。そもそも詩は正しさを鑑賞するものではなく、詩を媒体に今この瞬間の自分がどれほど心を動かされるか…。だから、同じ詩でも、時々で解釈が違っていても、受け取るものが違っていてもいい。詩も他の芸術と同様、それだけ自由度の高い芸術なんだ、と思いました。

さて、ここで歴史背景と作者の背景を振り返りますと、日宋貿易でも有名な宋代は中国の歴史上、国民が最も豊かな時代でしたが、逆に軍事の方は非常に弱かったのです。そこで、王安石が対策の一つとして国権を強化する新法を打ち出したのですが、それがあまりに急激で、欧陽脩、司馬光、蘇軾等、多くの詩人たちが反対しました。元々は政策上の対立から始まったものが、次第に個人の利害関係、さらに派閥間の怨念にまで波及し、この権力闘争は、北宋が滅びる遠因にもなったのでした。

蘇軾は蘇東坡という名でよく知られています。この時代きってのエリートで、その父蘇洵、弟蘇轍も優秀な学者でしたが、王安石と対立して左遷され、後に中央政界に復帰して大臣クラスになるものの、政府を誹謗する詩を書いたという罪を着せられ流罪同然の身になりました。この蘇軾を尊敬していた李之儀も、この影響を受けて左遷に次ぐ左遷の不遇な官僚人生だったそうです。

さて、〔卜算子〕というのは、元は占いの言葉ですが、詞のタイトル〈詞牌〉としては、そういう意味は全くなくなっています。〈詞〉は、タイトルごとに、文字数の他、平仄押韻等複雑な制約があり、そこに、それぞれの詩人が言葉を当てはめて作った歌詞で

す。もともと妓女達が楽器を弾きながら歌っていたフォークソングの類でしたが、いつしかメロディーが失われ、歌詞の部分だけが後世に伝わっているものです。

同じ〔卜算子〕というタイトルでは、蘇軾の作品があります。副題として、「黃州定慧院に寓居して作る」とあります。これは蘇軾が、政府を誹謗する詩を書いて黄州に流罪になっていた時の作品です。長くなるので解説は割愛しますが、こちらは政治的な思いが込められ、仲間から外れて夜を過ごす鴻（おおとり）とわが身を重ね合わせ、孤独に耐え抜く強い意志を感じさせる男性的な詩で、女性的で大衆の心を掴む李之儀の作品とは対象的です。なかなか難解な内容で、当時の蘇軾の立場が詠み込まれているように見受けられます。

さて、この詩の解釈に関してもメンバーの方から質問がありましたが、植田先生はやはり「詩の解釈は個人の感動を基準に」という趣旨のアドバイスがあり、常々、詩の鑑賞は時空を超えた作者と自分の共鳴だと感じている私は、今回改めて先生のお言葉を胸に刻もうと思ったのでした。

bǔ suàn zǐ
〔卜算子〕

黃州定慧院寓居作 蘇軾

quē yuè guà shū tóng lǒu duàn rén chū jìng
缺月挂疏桐 漏断人初静
shí jiàn yōu rén dú wǎng lái piāo miǎo gū hóng yǐng
时见幽人独往来 缥缈孤鸿影

jīng qǐ què huí tóu yǒu hèn wú rén xǐng
惊起却回头 有恨无人省
jiǎn jìn hán zhī bù kěn qī jì mò shā zhōu lěng
拣尽寒枝不肯栖 寂寞沙洲冷

かけるがつ そ とう
缺月疎桐に掛かり

ろう た
漏断ちて人初めて静かなり

ゆうじん
時に幽人の独り往来するを見る

ひょうびょう こ とう
縹渺として孤鴻の影あり

きょう き こう べ
驚起して却って頭を回らずに

うら かえり
恨み有るも人の省みる無し

かん し
寒枝をえらび尽くして肯て棲まず

きししゅう
寂寞として、沙洲冷ややかなり

懐かしい列車の旅

文と写真＝村上直樹

去る 2023 年 11 月 17 日から 21 日まで、2015 年 9 月以来、約 8 年ぶりで上海に行く機会があった。先月号の「雑感」では開封の菊祭り(菊花文化節)を話題にした。今回の上海旅行では上海大学のキャンパス内で開催されている「上海大学第二十一届菊文化節」を見ることができた。中国の大学では新型コロナ以降、キャンパス内へ入るには顔認証が必要であるなど出入りがかなり制限されているが、この日は小春日和にも恵まれて、公園のようなキャンパスでは多くの家族連れがのんびり菊祭りを楽しんでいた。

写真はいくつかあった菊製のモニュメントの 1 つである。扇に「自強不息、道濟天下」(自ら強めて息まず、道天下を濟う)という校訓と「知行合一、追求卓越」(知と行を合一、卓越を追求)という校風の文字が書かれている。全体は大小様々な 586 個の菊の鉢から出来ている。

インターネットによると中国では全国各地で菊祭り(菊花節、菊花展)が開催されているようである。私自身は 2014 年 10 月に山東省済南市を訪れた際、趵突泉公園で開かれていた「済南市第三十五届趵突泉菊展」を見物したことがある



趵突泉菊展にて(2014年10月)

(写真参照)。これはなかなか盛大なものであり、見物客も多かった。清朝の乾隆帝はこの泉の水で入れたお茶は甘くまろやかな味わいがするとして趵突泉を「天下第一泉」と讃えたそうだ。また、河南省安陽市で出土した甲骨文を考証した結果、趵突泉に関する記述は遙か商代に遡るといふ(『Baidu 百科』による)。

さて、2023 年は新型コロナ禍もほぼ終息し中国への旅行も可能になった。私も大連(「雑感」9 月号)、上海につづいて河南省にもできれば年内に行きたいと考えている。2015 年 8 月 25 日に鄭州・成田間で「中国南方航空」が運航する直行便が開通してからはもっぱらそれを利用して鄭州に行くようになった。ただし、現時点で同直行便は運休しているので、河南省へはたとえ鄭州までとしても、以前のように中国国内の長距離移動を余儀なくされる。

北京から鄭州まで列車で行く場合は北京と広州を結ぶ京広鉄路(鉄道)を利用することになる(図の濃い路線)。京広鉄路の前身は北京と武漢を結ぶ京漢鉄路と広州と武漢を結ぶ粵漢鉄路である。前者は清の光緒 32 年(1906 年)4 月 1 日



上海大学菊文化節にて(2023年11月)



京広鉄路(『百度百科』より)

に開通し、後者は民国 25 年(1936 年) 9 月 1 日に開通した。そして、1957 年 10 月 15 日、武漢長江大橋によって両路線が結ばれ京広鉄路が誕生した(『百度百科』による)。この路線は北京を出ると河北省の保定、石家庄を通り、邯鄲を過ぎると河南省に入り、安陽、鶴壁、新郷を経てようやく黄河を渡り(鄭州黄河大橋)鄭州駅に至る。黄河は歴史的に幾度も流れを変えており、現在では安陽、鶴壁、新郷の各市は河南省の一部でありながら黄河の北に位置する。その後、許昌、漯河、駐馬店、信陽といった河南省内の各地を通過して湖北省に抜ける。

たとえば河南省開封へ行く場合、一般的にはこの京広鉄道で鄭州駅まで行きそこから鉄道、都市間バス等を利用することになる。ただし、北京から開封には別のルートも考えられる。北京から京広鉄道より 1 つ右(東)側の路線を南下し、

河南省の商丘から西に向かうルートである。開封は商丘と鄭州の間に位置する。この線を利用すると時間はかなりかかるが、北京・開封間を乗換なしに行くことができる点でとくに夜行列車の場合は便利である。

ところで、中国の鉄道は運行距離が長く、たとえば北京・鄭州間が昼間の運行であっても、いずれは夜間になるため在来線の長距離列車には通常寝台車両がついている。そこで料金は高くなるが、そうした寝台車両を利用することも多い。一部屋(区画)に向かい合って並ぶ 2 段あるいは 3 段ベッドのどこかは指定されているが、横になる時以外は一番下のベッドに腰かけて、皆でいろいろ交流する。私はほとんどいつも 1 人旅で言葉の壁はあるものの、それが結構楽しみであった。以下、私の経験の断片である。

知人に連れられて初めて河南省に行った 2005 年 9 月 5 日は北京西駅 12:47 発の九龍(香港)行きを利用した。途中工事のため定刻(19:07)に遅れること 2 時間、鄭州駅に着いたのは夜 21:00 すぎとなり、8 時間以上の長旅であった(定刻ベースでは 6 時間強)。目的地の開封までは車で更に 1 時間ほどかかった。復路は商丘経由の夜行列車を利用した。9 月 16 日の午後 19:10 に開封駅を発車し、北京西駅には翌 17 日の朝 5:50 に到着した。11 時間近くかかったことになる。

2007 年 5 月 15 日、開封に 5 回目に行った時は上海から昼間の成都行きの列車を利用した。朝 9:33 に上海駅を出発し、蘇州、無錫、常州(以上、江蘇省)、蚌埠(安徽省)、徐州(江蘇省)等を経て、開封に到着したのは夜 20:35。同室の四川人、陝西人、浙江人に日本人(私)の 4 人で、お国自慢など大いに盛り上がり 11 時間の長さ

を感じなかった。

同じ年の9月9日には北京から開封へ往路に商丘回りのルートで行った。朝8:33出発。この時一緒になったのは北京の大学でコンピュータを専攻し卒業したばかりの女性だった。本当は北京でそのまま就職したかったが事情があって地元の河南省商丘に戻るらしい。如何にも不本意そうだった。列車は覇州(河北)、聊城(山東)などを経て、17:15商丘着。彼女は降りていった。最近では地方の発展も目覚ましいので、彼女も地元で専門知識を活かせる場を見つけているはず、と信じたい。時々回ってきて気になっていた車内販売で果物をいくつか買った(写真)。もともと26元のところ、終点開封が近づいて売り切りたかったのか10元に大幅割引されていた。19:00開封着。直通とは言え、昼間10時間半をかけて北京からいわば逆回りで開封に行く旅客はやはり例外である。

四川大地震(5月12日)の2か月ほど前の2008年3月には成都で用事を済ませたのち、開封まで夜行列車で移動した。3月10日の19:00過ぎに発車。四川省内の徳陽、綿陽を経て翌日3月11日の朝7:15には黄牛鋪(陝西省)着。成都では太陽を見なかったのが久しぶりの青空が眩しかった。この時は19:27に私が開封で先に降りるまで、無錫に行く男性、常州に行く女性2人連れと一緒にだった(丸一日と半時間の旅)。女性2人は常州に住んでいて故郷は徳陽とのことであるから、出稼ぎをしているのかもしれない。この旅では2日目の11:20に西安に着いたのでプラットフォームに降り、一瞬古都西安の空気を吸うことができた。

2012年2月に北京から河南省南陽まで夜行列車K279番を利用した。このKとは「快速」

(Kuaisu)の頭文字である。発車は定刻から大分遅れ19:35。同室は2人の若い男性だった。実は彼らは警察官で警察手帳も見せてくれた。2人とは日本のことなどいろいろ話をして翌日の10:00前に南陽駅に到着するころにはすっかり仲良く(?)なっていた。

近年、中国全土で高速鉄道網が整備される中で2012年12月26日には京広高速鉄道も全線開通した。私も2013年5月に北京西駅から鄭州東駅までG79番列車の一等席に乗った。Gは「高鉄」Gaotieの頭文字である。料金は495元であった。9:58に発車すると速度表示はすぐ毎時303キロメートルを指し、途中唯一の停車駅である石家荘に11:06着、鄭州東駅には12:30に着いた。つまり、わずかに約2時間半である。

鄭州から開封までの交通も益々便利になり、以後、私も北京から河南へ行く時はもっぱらこの高速鉄道を利用するようになった。懐かしい鉄道利用の楽しみは遠い過去のものとなりつつある。

12月号で大川健三さんが貴重な現地スマホ決済事情を紹介されている。私は今回の上海旅行中、7月に日本で入れた「支付宝」アプリを地下鉄の自動販売機、肯德基(ケンタッキー)等で使ってみた。うまく行ってホッとした。



北京・開封の列車内(2007年9月)

古代中国の風流逸話－世説新語－（3）

顧 傑

今回は、世説新語「徳」編の続きを皆さんにご紹介したいと思います。

客有问陈季方：“足下家君太丘，有何功德而荷天下重名？”季方曰：“吾家君譬如桂树生泰山之阿，上有万仞之高，下有不测之深；上为甘露所沾，下为渊泉所润。当斯之时，桂树焉知泰山之高，渊泉之深？不知有功德与无也”。

訳文：ある客が陳謙ちんしんに尋ねた。“あなたの父上、陳ちん寔しよくが全世界の尊敬を集めた偉業と徳は何ですか？”すると陳謙は、「私の父は、泰山の一角に生える月桂樹のようなものだ。その上には万尺の高峰があり、その下には計り知れない深淵がある。上は雨露に恵まれ、下は深淵の泉に養われている。このような状況下で、月桂樹はどうして泰山がどれほど高く、深い泉がどれほど深いかを知ることができようか！私は彼にどんな功德があるのか知らないのだ」

解説：他人から、父親をどう思うかと訊かれて答えるのは難しい。高く評価すると傲慢に思われるし、自虐的になるべきでもない。陳謙は適切な比喩を使って、挑発的な客に慇懃無礼になることなく対応したといえるだろう。また、高峰は「皇帝」であり、深い泉は「人民」ともいえる。陳謙は、父親をその中間に立つ「月桂樹」に喩えたことも、非常に聡明だと思う。

陳寔：号は仲弓。かつて太丘の長を務めた頃の施政が民衆の心をつかんだことから、後世「陳太丘」と呼ばれるようになった。亡くなった時、3万人もの人々が弔問に訪れた。

陳謙：陳寔の四男、号は季方。父、兄とともに「三君」と呼ばれた。

陈元方子长文，有英才，与季方子孝先，各论其父功德，争之不能决。咨于太丘，太丘曰：“元方难为兄，季方难为弟”。

訳文：元方の息子、長文（陳群）は才能のある男だ。ある時、彼と陳謙の息子、陳忠ちんちゆうが自分たちの父親の経歴や性格について口論になり、意見がまとまらなかったため、祖父の陳寔のところへ聞きに行った。すると陳寔は言った「元方が兄であることは難しく、季方が弟であることも難しい、甲乙をつけることはできない」

解説：元方：陳寔の長男である陳紀ちんきの号。

長文：陳紀の息子、陳群。陳寔の孫。三国時代曹魏の重鎮。中国古代官僚選抜制度「九品中正制」、魏国の法律「魏律」の主要な創始者。

九品中正制：九品官人法。魏の文帝に始まり隋の初めごろまで行なわれた官吏登用法。地方の州郡に中正を置き、その地方の官吏志望者を九品（九等）に

分けさせ、それによって官品（官位）を与える制度（コトバンクより）

また、この一文は、「難兄難弟」（兄たり難く弟たり難し；兄も弟も優れて優劣がつけ難い）という熟語の出典である。

荀巨伯远看友人疾，值胡贼攻郡，友人语巨伯曰：“吾今死矣，子可去！”巨伯曰：“远来相视，子令吾去，败义以求生，岂荀巨伯所行邪！”贼既至，谓巨伯曰：“大军至，一郡尽空，汝何男子、而敢独止？”巨伯曰：“友人有疾，不忍委之，宁以我身代友人命”贼相谓曰：“我辈无义之人，而入有义之国”遂班军而还，一郡并获全。



著者「劉義慶」の肖像(百度百科より)

訳文：荀巨伯^{じゆん きよ ぱく}が病気の友人を見舞うために遠くからやってきた。町に入ってもなく、その町は強盗に襲われた。その友人は彼に言った。

「どうせ、私はもう長く生きられないんだから、あなたは出て行った方がいい！」と。すると荀巨伯は言った、「わざわざ、あなたに会いに来たのに、どうして出て行くことが出来ようか。私は、道徳や義理を裏切って、平穩に暮らせるような人間ではない」

強盗団が町に入ると、彼らは荀巨伯を見つけ、彼に尋ねた。「我々の集団がやって来た、と聞いた町の人々は皆逃げてしまったが、一人で留まる勇氣があるあなたは、一体、どなたですか？」

すると荀巨伯は言った。

「私の友人は病気になったため、町を出られません。私は彼を見捨てることに耐えられません。友人の代わりに自分が死ぬ方がましです」

強盗たちはこれを聞いて「徳のない我々が、徳のある人のいる場所に侵入したのか！」とつぶやいて、全員揃って引き揚げていった。

解説：荀巨伯：残された記録は無く、仁義が厚い人として知られていない。

この編は、「仁義は、盗賊団すら退かせられる」ということを表現している。

華歆遇子弟甚整，虽闲室之内，严若朝典。陈元方兄弟恣柔爱之道，而二门之里，两不失雍熙之轨焉。

訳文：華歆^{か きん}は子供たちに真剣に接し、家庭での礼儀作法も宮廷のように厳格である。

陳紀兄弟は従僕たちと自由に付き合い、親切に接している。しかし、両家とも「平和、安樂の準則」は失っていない。

解説：華歆：号は子魚、魏国初期の名士。

雍熙之軌：平和、安樂の準則

管宁、华歆共园中锄菜，见地有片金，管挥锄与瓦石不异，华捉而掷去之。又尝同席读书，有乘轩冕过门者，宁读如故，歆废书出看，宁割席分坐，曰：“子非吾友也！”。

訳文：管寧^{かん ねい}と華歆は一緒に菜園を鋤で耕し、地面に小さな金のかげらがあるのを見て、管寧はそれを瓦礫の石のように鋤を入れ、華歆はそれを拾って捨てた。

二人はある時、一緒に席で読書をしていた。すると華麗な車に乗った貴族がドアの前を通過した。管寧はそのまま読書が続けたが、華歆は本を置いて見に行った。管寧はその後、席を移動し、「あなたは私の友人にはなれない」と伝えた。

解説：管寧：号は幼安。春秋時代の齊国丞相・管仲の子孫。華歆、邴原^{へいげん}と共に「一龍」と呼ばれて、一匹の龍に例えられる。

この編は、熟語の「割席断義」の由来になっている。また、この話だけを見ると、どうしても華歆が名利を追うイメージが残るのだが、次の編では、華歆の別の側面を知ることができる。

华歆、王朗俱乘船避难，有一人欲依附，歆辄难之。朗曰：“幸尚宽，何为不可？”后贼追至，王欲舍所携人，歆曰：“本所以疑，正为此耳既已纳其自托，宁可以急相弃邪？”遂携拯如初，世以此定华，王之优劣。

訳文：華歆^{おうれう}と王朗は一緒に船に乗って避難しようとした。通行人が彼らのボートに乗ろうとしたので、華歆は即座に難色を示し、断ろうとした。しかし王朗は、「まだ余裕がある、なぜ受け入れられないのだろうか？」と、船に乗せた。

その後、強盗が追いかけて来たので、王朗はその人を船から下ろし、置き去りにしようとした。その時、華歆は言った、「こうなるだろうから、最初にためらったのだ。彼を船に乗せた今、どうして彼を見捨てることができるのか？」

この話から、華歆と王朗の人となりを探ることが出来る。

解説：この編では、一度約束したことは、全身全霊でやり遂げるべきだ、と語る華歆の側面が見えるだろう。恐らく、作者は、名利を追うこと自体は、人格の好し悪しを露わしていないことを語りたかったのだろうか。

「秦皇島」から「承德」へ

「避暑山荘・外八廟」駆け足旅行(9)

文と写真 吉光 清

パンチェン6世が、遙かチベットから承德にやって来たのは、どのようなことだったのか、興味が湧き、川崎市立図書館で本を探してみた。

大正時代に、自らの生命を賭してネパールからヒマラヤを越えてチベットに入国し、11年間の滞在のうち10年間をチベット仏教の修行(研究)し、ゲシェという仏教研究の最高位を認められた著者の、帰国後に著した寄稿文、論文を集めた書籍の中に、それらに触れた箇所があった。

1777年、乾隆帝から特使を通じて、北京に來臨するように懇請があった。パンチェンはあまり心が進まず、守護神から得た神託も“東方への旅行は危険がある”だったので、北京行きを固辞した。しかし、翌年、翌々年と使者が到着し、北京までの旅行に要する馬疋や食料万端の準備をした大部隊が派遣されて来たので断ることが出来なくなり、1779年の夏、二千名の随員を従え、タシルンボ寺を出発し、約二か月の行程で北方チベットを横断した。途中で乾隆帝から差し向けられた接待員や立派な轎の出迎えを受けた。クンブムに到着し越冬のため、およそ四か月間、青海湖畔に滞在して、春気が催すころになって、東方に向かいモンゴル横断の旅をした。歸化城、多論諾爾を経て、1780年7月に入って熱河(承德)に着いた。タシルンボ寺を出て、約一か年の月日がかかっている。乾隆帝はパンチェンを迎えるため、避暑山荘に行幸していて、7月21日に二人は初会見をおこなったのであった。

■「パンチェンの35日間 in 承德」

別の資料で見た、パンチェンの承德での行動記録(チベット側の)によれば、この日から、8月25日に北京に向けて出発するまでの、足掛け35日間をパンチェンは承德、そして「須弥福寿之廟」で暮らしたことになる。

「吉祥法喜殿」で最初の一夜を過ごしたパンチェンを、翌7月22日に乾隆帝が訪問し、パンチェン

の長寿祈願を行っている。

その後7月27日までの連日、皇子や皇女たちの訪問を受けたり、乾隆帝に招かれて観劇や宴会に出席し、7月26日には「晋陀宗乘之廟」において、乾隆帝の長寿と政治のための祈願を行っている。

その後、乾隆帝と合同で法要を営んだり、宮中で観劇をしたり、大テントでの宴会にも招かれ、皇帝の誕生日である「万寿節」当日には乾隆帝臨席のもと、「長寿儀軌」の修法を行っている。ざっと数えて、パンチェンが乾隆帝と対面した日数は12日に上った。

このように、「パンチェン・ラマ」をはるばる遠方から招き、滞在のためにわざわざ寺院を建設し、承德に到着後も破格の厚遇を示したことは、乾隆帝にとって政治的に重要な意味を持っていたに違い無く、パンチェン側にも招きを受ける必然性があったと考えることが当然であろう。

しかし、承德でのパンチェンの行動はチベット仏教の指導者としての儀式、行事に終始し、乾隆帝とも仏教に帰依する者同士の、信仰心と相互の尊敬の気持ちが現れていたように感じてしまう。

■「琉璃宝塔」の前に立って

「大紅台」を後にして、わずかな傾斜を進むと山頂に建設された「琉璃宝塔」の前に立った。



七層の塔身には56体の仏像が嵌め込まれている

一見してユニークな造形をしている。七層の搭身と、それを支える重厚な木造の楼閣（須弥座台基）から出来ている。搭も楼閣の屋根も察するところ八角形をしているようであった。光り輝く派手さは無いが、落ち着いた配色や緻密な装飾には壮麗さと高い芸術性が感じられた。

近くにあった説明板を見ると、「万寿琉璃塔」として説明文があったが、3行ほどの至ってあっさりしたものだった。



説明板の3行ほどの中文

「この搭は七階建てで八角形をしており、白台の基座には木製の回廊はついていない。搭の本体には黄色と緑色の琉璃瓦が組み合わされ使用されている。搭身には仏座がたくさん嵌め込まれ、56体（各階に8体ずつ）の『無量寿仏』が安置されていて、乾隆帝の『万寿無窮』が祈願されている。仏塔は山頂に屹立し、須弥に坐す仏のようであり、軒下の風鈴は微風が吹くと、読経の声のような音を絶えず響かせる」。情報は簡略で、妙に情緒的な解説だ。

それと知って見上げると、たくさんの仏像からの視線が気になった。楼閣に近づいて見ると、そこかしこにも仏像の装飾があった。乾隆帝がその化身とされた「文殊菩薩」だろうか？

搭身を支える楼閣の屋根は中華式で、お馴染みの「走獣」が見られた。ここでは、「鳳凰に乗った仙人」が先導しており、走獣は5匹であった。

■タイム・アップ寸前に焦る

須弥福寿之廟の最奥まで来たところで、少し空腹を感じ、時計を見た。すでに11時を回っていた。午後の時間は「避暑山荘」のために取っておかなければならないので、お寺巡りに使える時間はもう1時間も無い。これから寄り道して拝観するとすれば、「安远庙」か「普乐寺」くらいである。しかし、徒歩で向かうのは時間的に苦しい。



出入り口の頭上に彫られた仏像

「山門」前の駐車場まで戻ったが、タクシーは見当たらず、ヒッチハイクを行う勇気はない。ここで、お寺巡りの続行は諦め、何はともあれ、山荘を目指して歩き始めたが、蒸し暑さがひどくなって来て、汗まみれになってしまった。

交差点で右折し、「山荘路」に入ると、2階建ての飲食店が軒を連ねる市街地になった。昼時で、車道の両側は車が駐車しているので、車が走れるのは道路中央の一車線分のスペースだけである。

ランチタイムの余裕はないので、先を急いで歩道を歩いたが、日本ではお目に掛からない看板を見て立ち止まった。中国語がダメな筆者にも想像がつく内容だった。「违法占地必究・违法建築必拆」であった。この看板があるということは、これが横行しているということかと唖然！

道路右側の民家が途切れたところで、広い野原が見え始め、地図でも「避暑山荘」の一面に違い無かった。そこに入って行ける道が有り、出入りをチェックする詰め所も見えなかったので、近道が出来ることを期待して、つい、慎重さを欠いてしまった。

パオの集落が現れ、「蒙古包度假村」であることは予想通りだったが、境界が造られ「避暑山荘」内に直結する道にはなっていなかった。（つづく）

資料:

- 1)「多田等観全文集—チベット仏教と文化—」、多田等観著、今枝由郎監修・編集、白水社、2007.
- 2)「チベット仏教世界の歴史的研究」、石濱裕美子著、東方書店、2001.

連雲港文筆峰の伝説

訳：一瀬靖子／大槻一枝

筆者は終戦後も大連に残って仕事をしていて、山東省で出来た知人の息子さんと、引き揚げ後も文通をしていました。今回の民話は「中国の民話の資料が欲しい」と連絡したら、送ってくれた中にあったものです。詳しい出典は分からなくてすみません。

“西遊記”は“三国志演義”“水滸伝”“紅樓夢”とともに、「中国四大奇書（名著）」として知られています。明の時代の作家、呉承恩（1504頃～1582頃）による長編小説とされます（異論もある）。“西遊記”では、「花果山」は孫悟空が生まれた場所です。

この話は呉承恩と“西遊記”に纏わる話になっています。「花果山」、「水簾洞」、「文筆峰」は、ともに江蘇省連雲港市にある地名です。

“西遊記”でお馴染みの「花果山」は、中国江蘇省の東北（連雲港市郊外）に、今もなお昔の姿のまま聳えています。連雲港に面した高公島は、三面を青々とした山に囲まれ、絵屏風を立てたかと思われるような美しいところです。入江の平らな一角に青い大きな岩が立っています。その岩は筆にそっくりなので、「文筆峰」と呼ばれています。

文筆峰の北側には、石畳が層をなして、まるで分厚い本を重ねたような岩があり、人々はこれを「万卷書」と呼んでいます。そしてまた念入りにも、そのそばにはもう一つ横に寝そべった青い石があるので、その石はラクダのこぶのように突き出して、筆置きのような形になっているので、人々はこれを「筆置き石」と名付けました。



「西遊記」明代早期版(ウィキペディアより)

連雲港の老人たちは、これらの岩は“西遊記”を書いた呉（承恩）先生の落とし物だと言って

います。

呉先生の筆や筆置き、それから本などが、どうしてこんなところで石になったのでしょうか。それについて、次のような言い伝えがあるのです。

明の時代、万暦年間に、呉先生は三年の間、三元宮にこもって“西遊記”と、もう一つの神話“禹鼎志”を書きました。長年苦心の末、やっと二つの原稿を書き上げてホッとした呉先生は、酒と肴を用意し、筆や硯、それに出来上がった原稿を抱えて、お気に入りの「水簾洞」にやってきました。

呉先生は「水簾洞」が大好きでした。洞の中は静かで涼しく、夏はよくここへきて書き物をしました。洞の周りの壁からは、冷たい石清水が細い流れとなって落ちてきます。きれいな水は、時折差し込む日の光にキラキラと真珠を連ねたように輝きます。洞の中には小さい井戸もあります。その水の冷たくておいしいこと！呉先生は書き疲れると、この水で口を嗽ぎ、顔を洗って、ぶるるンと身震いすると、もう一度シャンとした気分を取り戻すのでした。

この日、“西遊記”を書き上げて、肩の荷を下ろした呉先生は、実にいい気持でした。好きなお酒をチビリチビリ飲みながら、洞の外に目をやって、のんびりと過ぎていく時間を楽しんでいました。

この時、一匹のボス猿が数匹の群れを連れて、水簾洞の前で遊んでいるのが目に入りました。猿たちはそれぞれ枝の間を飛び回ったり、花や果物を取ったり、石や果物の殻を投げ合ったり、石を重ねて塔を作ったり、砂のトンネルを作ったり、トンボや蝶々を追いかけたり、互いにシラミを取ったりしています。頭を搔いているもの、押し合いへし合いして遊んでいるもの、実に賑やかです。呉先生は見れば見るほど楽しくなりました。ポンと膝を叩くと、

「素晴らしい！」

というなり、筆を執って猿たちの群れるさまを描き、その生き生きとした描写を“西遊記”の第一部に書き加えました。

呉先生はうまい酒を飲みながら、ゆっくりと原稿に手を加え、“西遊記”の仕上げができた頃にはお酒も回り、いい気持ちに酔いつぶれて、ついには眠ってしまいました。

外で遊んでいた猿たちは、お酒を飲んでお爺さんが、眠って動かなくなったのを見て、恐る恐る洞の中に忍び込んできました。そしてすっかり眠りこけているお爺さんを確認すると、今度は先を争って残りのお酒や肴を食べ、その上、そっと呉先生の腕を持ち上げると、腕の下にあった“西遊記”の原稿まで盗み出して、ボスのところへ持ってきました。

ボス猿は、

「こりゃ面白い」

と笑い転げました。小猿たちも集まって来て争って見ようとします。ボス猿は

「こりゃいい、この爺さんは俺たちの大王様を“美猴王”、“斉天大聖”と書いて、すごい神通力で、妖怪変化を怖がらせ、玉皇大帝や王母様さえも手こずらせたと書いているよ。俺たちも鼻が高いじゃないか」と言いました。

群れの猿たちは大喜びで、キャッ、キャッと叫びながら踊ったり、でんぐり返しをしたりしました。ボス猿は、

「騒ぐな。ところでもう一つの“禹鼎志”というのは何だい？」

と大きな声で聞きました。

猿たちは急いで“禹鼎志”をボス猿に見せました。“禹鼎志”も神話だったのです。けれどもボス猿はこれを見ると、

「なーんだ、こんなものつまんないや」

と言いました。

「“西遊記”だけを皆に見せよう。俺たちの大王様、美猴王のことだけでいいさ、あとは捨ててしまえ！」

「そうだ、そうだ」

小猿たちは大喜びです。そこへ一匹の大猿が来て、「この本を捨てても、あの爺さんはまた書くだらう。いっそのこと、筆や硯も一緒に盗み出して捨ててしまおう」

と言いました。

「それはいい」

猿たちは口々に賛成しました。



花果山景区の山門 (baidu.com より)

もう一度、水簾洞に忍び込んでみると、呉先生はまだ酔いつぶれたまま、いびきをかいて寝ています。猿たちは安心して洞の中を、わが物顔にキャッ、キャッと大騒ぎしながら、あちこち掻きまわして、われ先に、手あたり次第に運び出し始めました。

原稿を抱えて来るもの、硯を引きずって来るもの、筆を担いでくるもの、屏風を持って来るもの。酒や肴まで盗んで、洞の中は、まるでつむじ風が吹いたように、すっかりきれいになってしまいました。

いたずらな小猿たちは、“西遊記”をめくっては嬉しそうに指さしたり、お互いに耳やあごを引っ張りあったりしてふざけています。

ボス猿は、呉先生がどんなにしても自分の筆や硯、原稿などを探し出せぬように、猿たちを連れて力の限り走りました。

猿たちは、たくさんの山々を一気に跳び越えて、高公島のそばの海辺に着きました。そしてボス猿の命令一下、手に持ってきたものを一斉に山の下めがけて投げ捨てたのです。

ガラガラという大きな音とともに、屏風は浜辺に落ちました。そして「錦繡山」になったのです。筆は入り江に突き刺さって文筆峰になり、筆置きは転がって筆置き石になりました。そして“禹鼎志”は、石の本になってしまい、誰にも読まれずに、そのままになってしまいました。

呉先生の硯はどうなったのでしょうか。硯はいたずらで怠け者の小猿に持ち出されましたが、水簾洞を出て間もなく、花果山の中腹の“八戒石”のそばに捨てられて仙石となったということです。

高公島の文筆峰に手を触れると、きっと頭がよくなると、土地の人々は今でも言い伝えています。

心の復興者・二宮尊徳(2)

和田 宏

〈心の復興者〉

「廻村」では、尊徳は、殿様から派遣されたうさん臭い代官と農民達に思われ、どうせ巧いことを言っ
て年貢をこれまでより多く取り立てて自分の手柄に
しようとしているのだろうと、反発を買った。一方、
補佐役の武士たちは元農民の下に置かれて面子丸つ
ぶれの上、農民は楽になっても藩士の禄(給料)は削
られるとして反対し、殿様に讒言した。桜町の改革が
武士と農民の上下からの反発でうまく行かず、苦境
に立った厄年 42 歳の尊徳は、1829 年、行方をくら
まし成田山新勝寺に籠って 21 日間の断食修行をし
た。この時、世の中には、何か事を始めれば必ず賛成
するものもいれば、反対するものもある。対立がある
から新しいものが生まれるのだと、尊徳は悟る。ヘー
ゲルの「テーゼ」があり、それに対立する「アンチテ
ーゼ」があり、それらがアウフヘーベンして「ジント
ーゼ」が生まれるという弁証法と同じである。そし
て、彼はそれまでの「高き固い狭い心」から「低き柔
らかき広い心」に目覚めたという。断食のあと、わず
かにお粥を食べただけで、千葉県成田の新勝寺から
80 キロメートル離れた栃木県の桜町まで一日で歩き
通して帰り着き、待ちわびていた農民たちに迎えら
れた。

尊徳は、無理解や妨害にもめげず、誠意をもって頑
張った。朝から酒を飲み、博打にうつつを抜かし、人
を信じられなくなっていた農民たちは、彼に徐々に
心を開き、農作業に励むように変わっていったので
ある。尊徳は農民の心に誠実の明かりをともした。だ
から尊徳は『農村の復興者』で
あるのは勿論、『心の復興者』で
あると主張したい。

〈お金で人を造る〉

尊徳は独特の哲学を持っ
ていた。「お金」は「徳」が表現さ
れたものであり、お金持ちは、
「徳」を授けられた人というこ
とである。その「徳」に報いる

ように「お金」を使うべきだと考えて、お金のことを
「報徳金」と呼んだ。『報徳』という言葉は、小田原藩
主・大久保忠真が“あなたのやり方は「以德報徳」で
ある”と褒めた言葉から来ている。尊徳は、全ての人、
全ての物に徳(価値)があるのだから、全ての徳に報
い、大切にしようと、4つの徳目を実行した。①「勤
労」—一生懸命働いて人や社会に役立つこと。②「儉
約」—物を大切にし、無駄のないようにすること。③
「分度」—自分にとって相応しいだけのお金を使うこ
と。④「推譲」—将来のために貯金し、人や社会のため
に使うこと。

尊徳は、『五常講』という金融制度の一種を考えつ
いた。大勢の人から少しずつお金を集めて、それを必
要とする者が活用するシステムである。返済のルー
ルは①分割返済、②冥加金の支払いとした。分割返済
が終わったら、徳に報いるために冥加金を払う。冥加
金が利子に当たる。また、『五常講』に参加するには
「仁義礼智信」という5つの徳目を誓わせた。余財の
ある人が、困窮者に金を貸し付けるのが「仁」、正し
く返済するのが「義」、返済後、恩義に感謝して冥加
金を差し出すのが「礼」。いかにして早く借りました
お金を返済するか工夫努力するのが「智」。そして、約束
の厳守が「信」である。更に返済不可能にならないよう
連帯責任制を導入した。1両のお金を1ヶ月に2回
運用すれば2両の役割を果たすように、活発な運用
で利用価値を高めた。その結果、『五常講』に参加し
た人は皆喜び、人間的にも成長して行った。金の貸し
借りという俗事を、このようにストイックに高め、人
格形成を図ることが出来たのだから、大したものだ。

〈大塩平八郎の乱との比較〉

1833年の夏、尊徳は茄子を食べ
て、味がおかしいことに気づき、凶
作に見舞われることを予測した。
彼は、冷害に強い稗(ひえ)や粟を
米の代わりに植えるよう指導し、
桜町藩主から了解を得て一軒ごと



二宮尊徳像(報徳博物館サイト)

に食料の備えを調べ、蓄えさせた。天保の大凶作・大飢饉（1833～1836年）では、津軽藩は9割の減収となり、餓死者は4～5万人に達したが、桜町領では餓死者は出ず、他の村を援助するほど余裕があった。

一方、故郷の小田原藩でも凶作のため米が取れず、江戸屋敷に居た病床の大久保忠真は、“藩の米蔵を開き、飢えに苦しむ領民に米を分け与えよ”と、尊徳に伝えた。小田原に戻った尊徳は、これを伝えたが、藩の重役達は、“殿がそう言ったかどうか確かめるまでは米蔵を開ける訳には行かない”と拒んだ。当時小田原と江戸の往復に4日間かかった。尊徳は、“それでは、お使者が江戸に行って帰るまでの4日間、私も何も食べないでいましょう。お侍様にも飢えの苦しみが分かっていただけの良い機会です。米蔵が開けられる迄、皆様方も私と一緒に4日間、断食なされ！この間に飢え死にする者がどれだけ出るかもしれないのですぞ”と、断食を迫った。重役達は、“判った”と、尊徳の言うことを聞き入れ、米蔵は開けられて、餓死者は一人も出なかった。

尊徳の名は、ますます知れ渡り、仕法（農村の立て直し）の要請が殺到した。尊徳が行った仕法は、600以上の村に及び、何万人と言う農民の命を救ったのである。1837年には、大阪東町奉行所の与力・大塩平八郎が飢饉の救済策が聞き入れられず、自分の蔵書売って620両を得、密かに近在の農民に檄文を発して仲間とし、蜂起したが、わずか1日で乱は鎮圧され大塩も自刃した。『知行合一』の陽明学の儒学者である大塩が、正義の味方であっても、農民一人の飢えさえも救えなかったのは、悲劇であった。

<尊徳さんはどんな人だった？>

身長が182センチ、体重が94キロもある頑丈な大男だった。結構短気で、怒鳴り散らすことも多かったようだ。食卓に出た食べ物は、どんな物でも残さず全部食べた。30歳できのと結婚したが、生まれた徳太郎が2週間で亡くなり、離婚。33歳でなみと再婚、弥太郎と文子を設けた。36歳で小田原藩から武士に取り立てられ、桜町領の立て直しに取り掛かった。

1842年、55歳の尊徳は、老中・水野忠邦から、江戸幕府の御普請役に取り立てられたが、最大の理解者であった大久保忠真が亡くなり、反対派が強くなって、生れ故郷の小田原から追放処分となり、1855年、一家は栃木県に移り住んだ。

頑丈だった尊徳も病床に伏すようになり、1856年10月20日、今市市で亡くなった（69歳）。ペリー来航から3年後だった。遺言は、“墓石を立てるな。土を盛り上げて松か杉を1本植えておけばよい”であった。彼の仕法は、息子の弥太郎を始め、大勢の弟子達が引き継ぎ、農村の立て直しを進めて行った。尊徳の教えを広める「報徳社」が明治初めには全国に1000社を数えるまでになった。戦前の日本では道徳の権化とされた。神戸市にある報徳学園は、尊徳の孫・二宮尊親が校長だった時もある。栃木県真岡市には「二宮尊徳資料館」や像があり、栃木県民は、「郷土の偉人」として崇めている。栃木県で私が気安く“尊徳さん”と発言して、叱られた経験がある。「尊徳翁殿」と言うのが正しいと教えられた。

<尊徳の哲学>

尊徳の哲学は、儒教と仏教を混ぜ合わせたような『一円融和』である。所詮は体制維持に加担する役割を果たしており、限界が見えると言え言える。しかし、新聞もラジオもテレビもスマホもなく、世界はおろか、国内で起きている出来事さえも、知る由も無く、個人の尊重、言論の自由もない社会である。それどころか、生まれながらにして「士農工商穢多非人」の身分制度があり、職業選択の自由も、居住の自由も、立法・司法・行政の権限を、全人口の7%に過ぎない武士階級が独占していた。武士には“斬り捨て御免！”が許されていた、恐ろしい世の中だった。こんな不条理な時代の大きな枠組みの厳しさを斟酌すると、尊徳の思想上の限界は止むを得ないだろう。いやむしろ彼は当時としては破格の進歩的な考えを持ち、実行した人であったことは間違いない。彼は『士農工商』の上下の身分制度を水平の関係と位置づけ、それぞれの任務分担と見ていたのではないだろうか。尊徳の考え方、生き方は時代を超えて現代社会でも充分通用すると私は思う。決して勤儉節約ばかりを唱えるケチな小父さんではない。小田原藩主大久保忠真に見いだされるという幸運もあった。しかし、彼が一介の貧農だったことだけを考慮しても、桁外れの偉大な人物であると言わなければならない。

尊徳は、人の守るべき道や農作業に関する短歌（“道歌”）を沢山作った。下はそのうちの二首。（完）
♪可愛くば、五つ数へて三つほめ、二つ叱って良き人となせ
♪田の草はあるじの心次第にて、米ともなれば荒地ともなる

第 197 話 共同で買う

兄弟で、お金を出し合っって一足の靴を買いました。兄さんが弟に言いました:「俺が先に履くから、お前はその後で履けよ」

何日も経ったのに、兄さんは一向に弟に履かせてくれません。弟は履いてみたくてうずうずしていました。ある晩兄さんが寝てから、その新しいを履いてみました。すっかり気に入って、毎晩兄が寝てから履いて辺りを歩き回ったので、靴は直ぐに破れてしまいました。

暫くして、兄がまた弟に相談を持ち掛け、もう一度一緒に靴を買おうと言いました。弟は、眉間に皺を寄せながら言いました:「一緒に買うのはいいけど、僕の睡眠時間が短くなるからなあ」

第 198 話 基準値で靴を買う

ある人が、靴を買おうとして、足の長さや幅を測り、カタログから靴のスタイル写真を切り抜いて用意をしました。靴屋へ行き、店員に靴を買いたいと言い、上着のポケットに手を入れて、折角の資料を忘れて来たのに気が付きました。急いで家に帰って資料を持ち、再び店に行くと、店はもう閉まっっていて、靴は買えませんでした。

傍にいた人が彼に訊きました:「どうして店に来た時に、履いてみて試さなかったんですか？」

彼は答えて言いました:「私はカタログのサイズを信じます。自分の足は信じられないのですよ」

第 199 話 靴を叱る

ある人が、朝早く街へ出かけて、途中で水路にぶつかり、飛び越えようとして、靴を水路の中に落としてしまいました。慌てて水に手を入れて、拾おうとしましたが、靴は流れて行ってしまいました。彼は流れていく靴に言いました。

「お前は、私の足をしっかり包んでいたのだから満足

していたと思っていたのに、お前の本心はそっちへ行ってしまうことだったのか」と言い終わるや否や、はだしになって歩いて行きました。

第 200 話 ま、悪くない

ある日、ある人がはだしで畑を耕していました。はだしの足には、木の根や蔓が絡まりました。彼は、木の根や蔓を取り除きながら、嬉しそうに言いました。

「ちょっと痛いけど、ま、悪くはないな。靴を履いていたら、木の根や枝で、靴に穴が開いてしまっていたらどうからな！」

第 201 話 ご面倒掛けますが

甲は乙が馬に乗っているのを見かけたので、すぐさま頼み込んだ:「すみませんが、このオーバーを家まで届けてくださいませんか？」

「貴方はどうするんですか？」乙が訊いた。

「私は歩いて行きます」

「わかりました。村に着いたら、このオーバーはどこに届けばいいんですか？」

「私にください」

「貴方をどこに訪ねたらいいのですか？」

「ご心配なく。私はオーバーの中にいますから」

第 202 話 服を買う

張三は服を買おうと街へ出た。店で手頃な中国服を見つけて買うことにして、お金を払う用意をしながら、店員に言った:

「あのズボンも見せてくれ」

店員がズボンを手渡すと、張三は支払いをして、ズボンを持って、店を出て行こうとした。店員が慌てて言った:

「ズボンの代金を頂いていませんが」

「さっきの支払いに、この代金も含まれるはずだ」

まちカフェに参加

第17回市民協働フェスティバル「まちカフェ」は、12月2日(土)～12月10日(日)に市内各地会場とオンラインで開催された。今年のテーマは「町田には＋プラスがいっぱい 未来に×カケル新たな出会い」

初日の12月2日は町田市庁舎を会場に参加団体が一堂に会して、ワークショップ、販売、展示、ステージ発表等、様々なイベントが行われた。

わんりいもその日に参加。場所も昨年と同じ3階で、満さんの水墨画のワークショップとモンの小物と会員の手作りトートバッグ等の販売。

満さんの水墨画は午前1回、午後2回の各回4名、来年の干支の辰を描いた。ホワイトボードに貼られた満さんの龍の絵の精巧な素晴らしさに「これはちょっと私には無理だわ」と躊躇する人も多く、午前中は参加者2名。サービス精神旺盛な満さんは興味を持って足を止める観客の質問にも丁寧に応えていた。午後からは事前予約もあって席も埋まり首尾よく終わることができた。昨年のまちカフェは今年の干支の兎を描いたので、描きやすかったからか小学生の参加があったが、今年は残念ながら大人のみでの参加だった。

物品販売はモンの小物が多少売れたが、トートバッグは売れなかった。対面のブースが無料のトートバッグに絵を描くコーナーだったので、割を食った形だった。(S.K.記)



水墨画教室①



ボードの水墨画見本に見入る人々



水墨画教室②

◇満柏画伯の漢訳俳句◇

大三十日愚なり
元日猶愚なり

正岡子規

chú xī yú qiě bèn
除夕愚且笨

yuán dàn bèn qiě yú
元旦笨且愚

【わんりいの催し】
皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体のを抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：1月23日（火）10：00～11：30
2月20日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

\*\*\* 中国語で読む 漢詩の会 \*\*\*

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：2024年1月、2月 休 講
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp  
(有為楠)



■1月定例会 代表宅

- ▼1月11日（木）13：45～
- ▼2月15日（木）13：45～

■‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼2月号 休 刊
- ▼3月号 未 定

☆☆ 編集後記 ☆☆

明けましておめでとうございます。新しい年はどんな年になるのでしょうか。

地球上では、戦争や内乱が絶えず、地域の人々にとっては、今年も苦難が続くことでしょう。ニュースで戦地の惨状を見ると、何とか早く戦争が終わってほしいと思います。

一方、我々も、生活することで地球を痛めつけています。アイスランドの溶岩噴出は、地球の怒りがほとぼしり出たものではないかとさえ感じてしまいます。

2024年からは、地球への負荷が少ない生活が出来ないものかと考えています。

戦争や、地球温暖化を阻止する選択権が我々一人一人に与えられ、投票や生活改善で戦争や地球温暖化が阻止できたらすばらしいのに、と2024年の夢をみえています。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座:00180-5-134011 わんりい 10月以降の入会は、当年度会費 1000円

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’ 290号の主な目次

干支の話「龍年にちなむ諺と言葉」	2
大川さんの年賀状	3
寺子屋 四字成語(69)『孤注一擲』	4
漢詩の会報告 (70) 李之儀『卜算子』	5
「中原雑感」(38) 懐かしい列車の旅	7
古代中国の風流逸話『世説新語』(3)	10
「避暑山荘・外八廟」 駆け足旅行 (9)	12
『連雲港文筆峰』	14
『心の復興者・二宮尊徳』(2)	16
中国の笑い話 (56)	18
みんなの広場	19
‘わんりい’の催し・お知らせ	20